

わたしたちの、  
集団的詩的想像力の発揮は、  
いかにして可能か？

OMOONOCITY トークイベント記録小冊子

# 渋谷に、 ヌンは可能か？



ゲスト：伊藤龍平（国学院大学教授） 聞き手：熊井晃史

OMOOCITY トークイベント記録冊子

渋谷に、ヌシは可能か？

omoomocity production

# 渋谷に、「ヌシ」は可能か？

もっと言うと、実のところ、

渋谷に、「ヌシ」なるものに棲んでいて欲しい。

人知では測り得ない存在を都市で感じたい。

もっと言うと、実のところ、

それを感じる場所があつて欲しい。

伝承文学を研究する伊藤龍平氏のヌシ論では、

「ヌシの伝承は、自然が人間より

優位である場合や、拮抗している場合に生じる」と言われているので、今の街並みを見渡してみると望みが薄いような気もする。

でも、それでも、それだからこそ、考えたい。

渋谷に、「ヌシ」は可能か？を。

「闇への畏れと詩的想像力とを取り戻すこと、

それは人間の本能を守ること」であり、

「ヌシの付き合ひ方を学ぶこと」が、

それは自然との付き合ひ方を学ぶこと」とする、

伊藤氏とともにこの問いについて考えてみたいと思います。

OMOONOMOCITY トークイベント

「渋谷に、ヌシは可能か？」

日時：二〇二四年一月二十九日（月）十九時から二十一時

会場：渋谷ヒカリエ八階 COURT

ゲスト：伊藤龍平（國學院大學教授）

聞き手：熊井晃史（omnocity / GAKU / とまが）

主催：omnocity production 共催：渋谷ユカリヒ Creative Spaces

## 伊藤龍平

1972年、北海道生まれ。2003年、國學院大學大学院修了、博士（文学）。同年、台湾・南台科技大学に赴任。2021年、國學院大學に着任。専門は伝承文学。口承文芸（昔話、伝説、神話、噂話など）を中心に、広く研究活動をしている。動物に関する興味は『ツチノコの民俗学』（2008年）、『江戸幻獣博物誌』（2010年）の頃から抱いていて、近著『ヌシ』（2021年）では、全国のヌシ伝承を通して、人と自然との関係を考えて。その他の著作に、『ネットロア』、『何かが後をついてく』、『怪談の仕掛け』など。



## はじめに

「渋谷に、ヌシは可能か？」と題して開催したトークイベント。この小冊子は、その様子の一部を取り纏めて再編したものになります。

「渋谷に」という箇所を他の地名に変えた途端に、このフレーズが持つ意味もそれに応じて揺らぐように感じます。つまり、「ヌシ」について考えるということは、その場所らしさを捉えていくようなものでもあるはずです。

一方で、人と場所、人と自然、人と人、そういった関係から集団的に創出される「ヌシ」の話は、私の、そして私たちのあり方を照らし返しているようにも思います。

「渋谷に、ヌシは可能か？」という問いがどのような意味を持つのか、そもそもそれが可能なのか。それらの探求はまだ始まったばかりです。

約八〇人が一同に集まった当日。

その熱量と内容の全てをお伝えすることは、そもそも叶うものではありませんが、これからも続くそれらの探求のために、この小冊子がなにかのきっかけになることを願う次第です。

\*トークイベント当日は、伊藤先生が著された日本でも世界的にも珍しい書籍『ヌシ・神か妖怪か』（笠間書院）に基づいて、ヌシとは何か？という概論を（紹介頂きました）。関心がある方は書籍にもぜひあたっていただければと思います。





### 渋谷川に存在感を感じなかった

**伊藤** 熊井さんは、渋谷川が今のようになる前ってご存じでしたか？

**熊井** 暗渠になっていたのと、ヘドロとか臭いがスゴかった記憶があります。

**伊藤** 私はですね、三十年ちよっと前に大学一年生だったんですけども、その頃はもう今と全然違う感じなんですよね。渋谷川っていうものの存在感が非常に薄かったです。

**熊井** 街に川があるという雰囲気はなかったんですかね。

**伊藤** 暗渠だったというのもあるんですけど、明治通りを歩いていると、川との間にビルがあるじゃないですか。だから渋谷川の存在感が薄くて「そう言われてみれば、なんだか水が流れてたぞ」という感じだったんです。そういえば、「ヒカリエ」の向かいに東口のバス停がありますよね。

**熊井** はい。

**伊藤** そこに渋谷川が流れてたんですよ。昭和三十年くらいの写真を見たらびっくりしますよ、かなりの水量なんですよ。

**熊井** へー。

**伊藤** それを工事して川のルートを変えて暗渠化したんです。

## ヌシとは何か

**熊井** そうやって考えていくと、今の場所でもヌシについて話をしていくことが不思議な気持ちになってきます。ところで、今回ヌシについて語っていくためにヌシ論の書籍を踏まえつつ、伊藤先生に色々整理を頂きました。やっぱり「長い間、同じ場所に住み続けている」とことや「からだが大きくなる」ということは大事なんですか。

**伊藤** 結構大事ですね。小さいものがあるんですけども、ヌシは、概ねデ

カイですね。

**熊井** へー。伊藤先生は、ヌシの定義と言いますか、整理をしていくために、全国のヌシの伝承を調べていかれたわけですか。

**伊藤** そうですね。ヌシの本を書くにあたって引用したものが三百三十三例あるんですが、実際はその倍以上は見てるんですね。

**熊井** 膨大ですね。

**伊藤** 同じような話が多くなっちゃうんで、だいぶ省いたんですけどね。ヌシじゃなかったとしても、霊的な力を持つ動物はデカイことが多いで

すね。

**熊井** あー。言われてみると、たしかにそのようなイメージがありますね。宮崎駿さんのアニメも浮かびます。ちなみに、ヌシについてだけ研究してる書籍や論文ってなかなかないんですよ。

**伊藤** ないですね。いずれ誰かが書くだろうと思っていたし、書いて欲しいなって思ってたんです。でも誰も書かないから自分で書き始めたんです。例えば民俗学の専門の辞典で『日本民俗大辞典』というものがあるんですけども、ヌシっていう項目はないんです。

**熊井** 結構意外です。

**伊藤** 意外ですよ。その理由は話し出すと色々長くなるんで、またの機会にしたいと思います。

**熊井** 是非、深掘りしていきたいです。ところで、ヌシが「死というプロセスを経ている」というところも気になりました。

**伊藤** 要するに、死んでからヌシになるわけじゃないんですよ。

**熊井** ああ。

**伊藤** 長く生き続けるから、からだが大きくなる。からだが変わ化したり

するっていうのは、生き続けているから。

熊井 ああ。

### 「生」の延長線上にある神秘

伊藤 つまり、生物は生き続けているうちに少しずつヌシ化していく、「生」の延長線上にある。これはですね、神社とかにある御神木もそうなんですよ。あれだって最初っからデカかったわけじゃなくて、少しずつ大きくなって神秘的な存在になってくる。付喪神ってご存知ですか。古くなっただ真の妖怪。妖怪というか神というかというものなんですけど、これも長い間使い続けていくうちに、道具

が道具ではない別の何かになる。

熊井 別の何か。

伊藤 そう。山姥もそうで、この法則は人間にも当てはまるものです。人間も年を取っていくといずれ人間ではない何かになっていく。要するに年を取っていくっていうことが、時間を超えていくっていうことにながっていくんですよ。

熊井 当初の存在のあり方から逸脱していくという。

伊藤 はい。そして、ヌシの住処である場所が淀んでるってこれ結構大事なんですわ。

熊井 淀み。住処に共通項があるんですね。

伊藤 はい。綺麗なところにヌシは棲まないんですね。「白河の清きに魚も住みかねて」なんて言いますけど。

熊井 え、どういう意味でしたっけ？

伊藤 水が綺麗すぎると、かえって魚も棲みづらいという。

熊井 ああ。

伊藤 その住処である場所から離れない。身体的な特徴がある。尋常ならざる力を持つ。これね、今でも「何とかのヌシ」って言い方しますよね。

「学生寮のヌシ」とか「会社のヌシ」とか、人間のことをヌシって言うことがあるんですよ。

熊井 銭湯とかサウナに行くところも同じ場所にいる人のことヌシって言いますわ。

伊藤 そうですよ。居酒屋でも、いつ行っても居るおじさんが「居酒屋のヌシ」とかって言われますよね。同じ場所にずっと身を置いている人間がいると空気が淀んだりするわけですが、ヌシの法則に当てはまっているといえますね。

熊井 なるほど。「ヌシに類似した伝承は海外にもあるが、ヌシに相当す



る語がないケースが多く「翻訳困難」ということなんです。又シという言葉にユニークさがあるんですね。

**伊藤** ヌシに近い存在ってのは世界中にあるんですよ。だけど、端的にヌシっていう一語だけで表現するということは海外ではないかもしれない。私は、台湾の大学に長いこと勤めてたんです。台湾人の同僚とか学生さんに、ヌシって中国語でなんて言うのって聞いたら、ないと。精、妖、怪、神、霊という言葉はありません。例えば、蛇だったら「蛇精」、亀だったら「亀怪」、魚だったら「魚怪」と言うんですが、単体で、精、怪、妖、って言うという意味が大きくなりす

ぎるんですね。なので、翻訳が難しい。

**熊井** 面白いです。

**伊藤** そうなんですよね。それで、英語が堪能な人にも聞いたんですけど、ヌシを英語に訳すとすると「ガーディアンスピリット」というのはどうだと。その場所について守っている。ガードしている。でも「スピリット」単体にしちゃうと、精霊という意味だから、大きくなりすぎちゃうんですよね。だから、もしかしたらヌシっていう言葉は、日本の特徴的なものなんじゃないかなっていうふうに思います。

**熊井** 日本の固有性というものがあるかもしれないと。

### 湿地帯の話

**伊藤** それで、ちょっと次は湿地の話をするんですが。

**熊井** 湿地。

**伊藤** 『常陸国（ひたちのくに）風土記』というものがあるんです。常陸国というのは、今で言えば茨城県ですね。風土記ですから、その歴史とかそういったものを記録した本です。もともとは全国でつくられていたんですが、今残っているものはそんなにない。それで、そこに「ヤ

トノカミ」や「ヤツノカミ」という記載があるんです。「ヤト」とか「ヤツ」っていうのは、「夜の刀」って思わせぶりの字が当てられていますけど、これ湿地帯のことです。

**熊井** ほう。

**伊藤** なので、「ヤトノカミ」や「ヤツノカミ」というのは湿地帯の神様。現在の茨城県の行方郡霞ヶ浦の付近が舞台なんです。継体（けいたい）天皇の御代（みよ）とあって、六世紀の後半の話です。箭括麻多智（やはずのまたち）という人が、草原を切り拓いて新しく田んぼを広げていたわけです。そうしたら、「ヤトノカミ」が群れをなしてばーっとやっ

てくる。それは蛇の姿をしているので、ビジュアルを想像するとスゴイことになっているんですが、それが田んぼづくりの邪魔をするんです。そうすると、土地の人はこう説明します。「蛇のことを『ヤトノカミ』と言います。頭に角が生えています」と。それで「その姿を見ると家系が絶えてしまうという不吉なもので、それがこの野原にはたくさん棲んでるんですよ」ということなんです。

**熊井** まさにヌシという感じがします。

**伊藤** それで、箭括麻多智は怒ったんですね。怒るって理不尽だなと思うんですけど、甲冑を身にまとい、

鉾を手にして、ヤトノカミを殺すんです。神様を追い払っちゃう。それで、沼の入り口に杖を立てて宣言するんです。

**熊井** おお。

**伊藤** 「その杖を境に、ここから上は神様の土地である。ここから下は人間の田である。今後、私は神職として永久に祀るから、どうか崇らないでほしい」と。実に身勝手、人間のエゴが出てるなと思うんですけどもね。

**熊井** 箭括麻多智は、ヒーローと言えはヒーローですけども、ヌシというか「ヤトノカミ」側からみるとヒ

リヒリしますね。

**伊藤** そうなんです。この関係ですよね。ちなみにね、この霞ヶ浦って、現在の霞ヶ浦と全くスケールが違ってますよ。今でいうと千葉県の印旛沼辺りまでずっと水続きだったんですよ。それをこうやって開拓して、埋め立てたりして、少しずつ少しずつ、現在の関東平野の姿が出てきた。

**熊井** 日本ってもともと湿地帯ばかりだったって言いますよね。

**伊藤** そうです。関東の茨城から千葉の北部辺りはもう水浸し。今でも、そんな感じはありますよね。北海道に行く飛行機で上空を通るときに見

ると、本当にもう至るところに湖があって山が見えないんです。

**熊井** 『水滸伝(すいこでん)』なんかを読んでいても感じるんですが、湿地帯っていうのは人間が非常にコントロールしづらいもので、そのような湿地的なものから連想されるイメージってやっぱりあるなと思います。

OMOOCITYイベント

2024年1月29日(月)19時から21時

渋谷ヒカリエ8階COURT  
無料・事前予約優先

# 渋谷に、 は可能か?



渋谷に「スシ」は可能か?  
もっと言えば、渋谷のどこか  
渋谷に「スシ」を学ぶものに  
勝つていく。

人知れず探検し、  
存在を知らずして感じたい。  
もっと言うと、  
笑のどこか、  
それを感じる場所が  
あって欲しい。

伝承文学を研究する  
伊藤龍平氏のメッセージは、  
「スシの伝承は、  
自然が人間より優れている場合や  
抵抗している場合が生じる」と  
とされているので、  
今の渋谷を認識していると  
望みが強いようにも感じます。

でも、それでも、それだからこそ、考えたい。  
渋谷に「スシ」は可能か?

「国への恐れと諷刺的批判力を取り戻すこと、  
それは人間の本能を守ること」であり、  
「スシとの付き合い、力を学ぶこと、それは人間との付き合い、力を学ぶこと」と、  
伊藤氏とともにこの問いについて考えてみたいと思います。

トークゲスト：伊藤龍平(國學院大学・教授)

聞き手：藤井見規 (omoomo GAKU とをめ)  
：佐藤博 (omoomo GAKU / SHOE MEAN DICK)



お申し込みは、公式サイトより  
<https://omoomo.org/>

主催：omoomo city 共催：渋谷ヒカリエ

ヌシとの付き合い方を学ぶこと、  
それは自然との付き合い方を学ぶことである。

——伊藤龍平『ヌシ 神か妖怪か』より

水は、ヌシがコントロール

すべきものだった

**伊藤** 本来、水っていうのはヌシがコントロールすべきものだったんですよ。国津神と天津神ってご存知ですか。

**熊井** え、知らないです。

**伊藤** 神社に行ったときに何か説明板がありますよね。そこで祀られている神様の名前が書かれているんですが、そこに、国津神とか天津神って書いてあると思うんです。それで国津神というのは、ニニギノミコトが天孫降臨で降りてきたときの、もともと地上にいた神様のことを言う

んです。

**熊井** まったく知らなかったです。

**伊藤** 日本の神様って二つに分かれるんですよ。そして国津神側の名前には、オオクニヌシとかオオモノヌシって、ヌシが入ることが多いんですよね。だから、征服者と被征服者、侵略者と被侵略者の関係が、国津神の天津神の関係で見取れる。大枠で言えば、ヌシのエピソードはほぼこの関係になるんじゃないかかと思えます。

**熊井** 先住のものと後から訪れたものとの闘いというか、関係のメタファーなんですかね。

**伊藤** それもありますし、人と水と  
いうのはそういうシビアな関係に  
あったということが言えるのだと思  
います。

**熊井** やっぱり、ヌシは水に関係し  
てくるものなんですかね。

**伊藤** やっぱり水ですね。空気が淀  
んでるっていうことでは、山の主で  
も当てはまるし、他にはお城の天守  
閣にもヌシがいるんですけど。

**熊井** え、天守閣にも。『オペラ座  
の怪人』みたいですね。

**伊藤** ええ、まあ、そう。淀んでる  
ということは条件なんですけど、

それは牛と馬っていうのは、どう  
やって人間と関わってきたかってい  
う問題なんですよね。

**熊井** あー、関わり方。

**伊藤** 何のために牛を飼ってたんで  
すかっていうとトラクターですよ  
ね。水田を耕作するために牛を飼っ  
てた。だから牛っていうのは水と関  
係が深いですよね。だからヌシ化す  
る。一方で、馬っていうのは、ヌシ  
の伝承にたくさん出てくるんです  
が、馬がヌシ化することは滅多にあ  
りません。馬はお供物なんです。

**熊井** お供物。

やっぱり水のヌシが多いなって思い  
ます。私の感触では、七割八割は水  
かな。その中で、さらにその中の七  
割八割を、蛇と龍が占めるなって印  
象があります。あと魚だと、鰻、鯉、  
鯰、岩魚、山女。この辺りがヌシ化  
する。

**熊井** 面白いですね。ヌシ化するも  
のとそうでないものの線引きにはな  
にがあるんでしょうね。

**伊藤** ヌシになる動物はいろいろと  
理由をつけられるんですけども、  
鯉なんかは龍の前身ですからね。例  
えば、馬はヌシになりにくいんです  
が、牛はヌシになるんですよ。そ  
こがちょっとまた面白いところで、

**伊藤** そう。もともと生贄にして  
いたけども、いちいち殺していたら  
大変だということで、馬の人形を代  
わりにする。そのうち、馬の人形を  
作るのも面倒だから、絵馬にする。  
そういうふうに使われていきますよ  
ね。

**熊井** わっ。なるほど。絵馬ってそ  
ういう由来だったんですね。

**伊藤** それで、鳥はヌシにならない  
んですよ。開放的な空間にはヌシが  
いないんですよ。

**熊井** やっぱり淀みが必要なんです  
ね。

## 一方的にヌシが 人間を襲うことはない

**熊井** 伊藤先生の書籍にもそのような記載があったような記憶がありますが、動物の生態学や行動学のようにしてヌシを見ていくという眼差しがありますよね。

**伊藤** ヌシの伝承をいろいろと見ていきますと、ある種の行動パターンが浮かび上がってくるんですね。そのなかで、例えばテリトリーや縄張りを作るといのがやっぱりある。それで、ヌシと人間が衝突する場合は、大体人間の方がその領域を侵犯しているんですよ。

（こころえもの）がたった一人だとしても、本人だけでなく、親族、一族郎党、ひいては村落共同体の成員全体が報復される。たった一人の心の不心得者のやった行為の報いが、地域全体に降りかかってくるんですね。これは、公害問題のことを考えるとわかりやすいと思います。

**熊井** だれかの過ちで地域全体が汚染されて、暮らしていけなくなる。

**伊藤** そう。だから、共同体の中で、そういうことをしないようにお互いに注意しあっていたというのは言い難いかなと思います。

**熊井** なるほどです。

**熊井** ああ。

**伊藤** 例えば、最近、映画がまたヒットしているゴジラの話もそうなんです。人間の側が水爆実験でゴジラの住処を奪ってしまったんですよね。それに対する報復としてゴジラが暴れる。人間が何もしなければ、何も起らなかったんですよ。さらに、ゴジラの話がヌシの法則にかなってると思うのは、水爆実験を直接的に行ったのは一部の人間なのにも関わらず、報復は東京都民全体や日本人全体に行き渡るんです。

**熊井** ああ。

**伊藤** ヌシの伝承でも、不心得者（ふ

**伊藤** ヌシって、理由もなく一方的に人間に襲いかかってくるってことではないんですよ。それにヌシが棲んでる場所ってのは大体決まっているんです。だから、要するに近づくかなければいいんですよ。行かなければ済む話なんですよ。そう考えると、ヌシって、基本的には安全な存在なんですよ。

**熊井** 伊藤先生は、伝承文学や民俗学の研究者でもちろんあるんですが、だんだんムツゴロウさんとか、生物学者のように見えてきました。

## 詩的想像力が喚起される場所

**伊藤** ヌシって、自然のなかに居るものであるって印象があると思うんですけど、実は人間がつくった人工の水域に棲む場合もあるんですよ。私も調べるまではあんまり印象になかったんですけど。

**熊井** へー。

**伊藤** 例えば、江戸時代は一国一城令と言って、一つの国にお城は一つしか許されなかったんですよ。でも戦国時代にはたくさんお城を作ってるから、打ち壊されてしまったものが多くあるんですが、堀は残るんですよ。残った堀っていうのはもう、

自然と同化して暮らしていきますよね。そういったところにヌシが生まれる。

**熊井** ああ。

**伊藤** 人工の水域でも、長期間、流れが停滞していれば、ヌシが棲むようになる可能性があるんですよ。

**熊井** 淀みが大切なんですね。

**伊藤** そう。でも、淀んでいても新しい人工の水域にはヌシはどうやら棲みづらいようで、例えば、プールとかダムがそうですね。ヌシは居ない。

**熊井** あー、なんか不思議と分かる感じがあります。

**伊藤** 将来的には、ダム湖のようなものには棲む可能性はあるかもしれないよね。

**熊井** えっと、それって、伊藤先生の言葉をお借りするならば、どういう場所において、人間の詩的想像力が喚起されるかという問いに置き換えて受け止めても良いんですかね。

**伊藤** そうですね。まさにおっしゃる通りです。やっぱり、人間の手を一度離れてるってことは結構大事なのかなんて思います。確かに人間が作ったんだけど、それが一旦人

間の手を離れてしまつて、自然に還っているというのがヌシが生まれるのに必要な条件なのかもしれない。

闇が失われつつある現在こそ、五官に作用する、  
原初的で不定形な妖怪について考える必要がある。  
闇への畏れと詩的想像力を取り戻すこと、  
それは人間の本能を守るのだと、私は思う。

——伊藤龍平『何か、が後をついてくる 妖怪と身体感覚』より

Information

澁谷に、文豪は可能か?  
2024年1月29日(月)19時から21時  
渋谷ヒカリエCホール  
無料・事前予約優先  
チケットゲスト: 伊藤龍平  
お申し込みは、公式ウェブサイト  
http://tamamoon.org

Hikarie



**熊井** 今回のトークイベントに向けて、渋谷について改めてリサーチをしてくださっていて、それもちょっと驚きました。

**伊藤** こういう機会がなければ、渋谷についてこんなに調べることがありませんからね。渋谷川についても話し出すと長くなるですよ。田原光泰さんという方が書いた『春の小川』はなぜ消えたか』という本、私が読んだ渋谷川関係の本で一番詳しい。この田原さんは渋谷のご出身で、白根記念渋谷区郷土博物館の学芸員の方ですよ。

**伊藤** 大名屋敷とかありますからね、そういう場所の庭園での用途があった。さらには、水の利用としては精米をするための水車小屋。もうね、渋谷の風物詩だったらしいですよ。

**熊井** 渋谷に水車小屋。

**伊藤** そう。今は一つもないですよ。これは個人の家で使うために作るんじゃないくて、産業としてやるんですよ。ただ、電気が普及するに当たってあつという間になくなってしまった。

**熊井** ああ。

**熊井** 郷土史というものの大切さが、最近身にしみます。

**伊藤** そうですよ。それで、江戸の内を流れるのが古川で、江戸の外をなぞるような形で流れるのが渋谷川。だから、都市の古川、田舎の渋谷川のような感じだったんですけども、都市化がどんどん進んでいくと両方とも都市河川になっていく。その渋谷川って、それに至るまでにどういう存在だったんだろうっていうところをざっくり見ていくと、もちろんこんな単純なものじゃないんですけども、一つは鑑賞に利用したっていうことがあるんです。

**熊井** へー。

**伊藤** 渋谷というのは名前の通り湿地帯でしたから、田んぼだらけだったんですよ。だから、水を水田や茶畑に利用する。

**熊井** お茶。

**伊藤** 実は水も綺麗だったから、お茶畑も有名だったそうです。最近でも、渋谷のお茶を復活させようというプロジェクトが新聞で紹介されていました。

**熊井** へー、知らないことばかりです。

**伊藤** もう今は考えられないんですけども、渋谷の名物はお茶だったん

ですよ。元々、渋谷川って人間の手によってその形を変えられてきた歴史が長いですが、その後、排水路として利用されていくんです。傍から見ると悲しい感じがするんですが、下水や生活排水が流されるようになって暗渠化していくんです。人間の手が加わるという意味では、遡れば江戸時代から渋谷川はそうなんですが、都市を流れる川の宿命ですね。だから、この状態の水辺にヌシが居るのかという話になってくるわけです。

## 逆開発

**熊井** 渋谷にヌシは可能かという問いを立てることで、そういうことも

業、農業、排水という利用のされ方を経てきたのを逆再生するかのよう  
に、元に戻していくという開発のあり方も一方であるはずなんだなど。

**伊藤** 世界的な潮流かもしれないですね。ある程度経済が発展した後に、もう一度戻していくという。容易なことじゃないですけどね。

**熊井** そうなんですよね。なんとなくですが、そういった逆開発といったものに賛成か反対かというような議論をしていくよりも、間にヌシというイメージナリーな存在が必要ない気がしています。というのも、賛成反対に終始する議論は、人と人との間の会話を絶ってしまうところがある

捉えていけるんだなとグッとときます。その問いに関する見解に進む前に少し話題を挟んでしまうのですが、渋谷川における人の水の利用のステップに関するお話を聞いていて、「逆開発」という言葉が頭に浮かぶんですね。これは、私が考えた言葉ではなくって、例えば日本という、千葉の養老溪谷駅の駅前広場は、バスロータリーをつくるために敷き詰めたコンクリートを剥がしてそこを森にしているんですね。それを指して「逆開発」と呼ばれている。日本以外でも、お隣の韓国でも、暗渠化されていた都市河川を改めて元に戻すという動きが活発化しているように思います。なので、ここまでのお話を聞いていて、川が鑑賞、産

からです。

## 治水、利水、親水

**伊藤** 人と水のあり方って基本的にはこれまで、治水と利水なんです。治水っていうのは、要するに水が暴れるからそれを力ずくで治めようとするもの。利水は、水を人の暮らしのために利用しようってことです。ね。だから水車小屋を作ったり、水田に水を引いたりとかっていうのは利水ですよ。治水ってことで言うとは、実は渋谷川が暴れ川になったのは、近代化が進んでからなんですよ。

**熊井** えー。

**伊藤** 水の流れが変わってしまっ  
て、行き場をなくした水が溢れて氾  
濫するっていうことで暗渠化を進め  
たんですね。暴れるから封じ込める  
という。一方で、九十年代後半くら  
いから親水って言い方が出てきてま  
す。親水公園という名前もあるくら  
いで、水に親しむというものです。

**熊井** あー。親水。用語としては比  
較的最近のものですね。

**伊藤** おそらく今のような形で使わ  
れたのは最近のことだと思えます。  
それで、二〇〇八年に「渋谷川・古  
川・河川整備基本方針」というもの  
が出ているんですが、そこでは「都  
市のにぎわいと人々にうるおいや

すらぎをもたらす渋谷川と古川の再  
生」といったことや、「まちづくり  
と一体となつたうるおいのある都市  
空間を形成する」と謳われているん  
です。

**熊井** そうですね。

**伊藤** 都市化した後の渋谷川で、こ  
の状態であったことって一度もな  
かったんです。なので、もとの状態  
に戻すっていうのともまた違うんで  
すよね。今の渋谷のままでどれだけ  
渋谷川から自然を感じられるように  
するかという、ちょっと今までには  
ない状況を作ろうとしてるというこ  
となんです。

**熊井** 今までにはない状況、なるほ  
ど。実際に渋谷川のほとりを歩くと、  
ベンチがあつて座れる場所が意外と  
多かつたり、植栽や都市農業と言っ  
てコンテナで畑をやっていたりと、  
なんだか確かに渋谷に新しい風景を  
生もうとしている意志を感じ取るこ  
とができます。

**伊藤** 人間に取り込まれたと言うと  
ちよつと悪い印象になるかもしれま  
せんが、里山・里川・里海っていう  
言い方があります。要するに、人によ  
つて作り変えられた自然ですね。  
里山という言葉は、九十年代から非  
常に良く使われるようになりまし  
た。それに対して、手付かずの自然  
を奥山と言います。

**熊井** 里山と奥山。

**伊藤** 宮崎アニメで言うならば、『も  
のけ姫』の自然っていうのは凶暴  
で奥山。『となりのトトロ』の自然  
は人に優しい里山となります。

**熊井** 分かりやすいです。

## ヌシと東急

**伊藤** ヌシが棲むのはどちらかって  
いうと、もちろん圧倒的に奥山が多  
いんですけども、里山にもヌシは棲  
んでるんです。「田園都市計画」つ  
てありますよね。もともとはエベネ  
ザー・ハワードが構想して、人と自  
然の共存を謳っているものですが、

東急がハワードを参照しつつ進めていたその計画というものは、例えば「田園都市線」という名前にも表れていますよね。渋谷ストリームの横の、渋谷川に親しむあの空間を作ったのも東急ってことを考えると、結構ヌシと東急っていうのは結びついてきますよね。

**熊井** ヌシと東急!!!

**伊藤** その話を東急のヒカリエという、この会場で話して良いのかわかりませんが。

**熊井** 二子玉川ライズという商業ビルの屋上に、ビオトープがあるんですが、そこにカルガモが営巣して卵

風景を都市で育めたらなと思わなくもないです。

## 為政者と水、民と水

**伊藤** やっぱり為政者は、治水利水に心を砕くんですよね。それを民間でどれだけできるのかって話ですよね。

**熊井** そうですね。為政者が為政者である大義として、その治水を司れているかどうかみたいところがありますよね。

**伊藤** 治世と治水は、もう紙一重ですね。

を産んだりしていて、東急の方々が嬉しそうにしていた記憶がありません。きつと、ヌシが居そうなまちづくりをしていますよねって言ったら喜ぶ人達が多い気がします。ところで治水・利水・親水といったものをキーワードとしたときに、頭に浮かんできたんですが、大熊孝さんという方の『技術にも自治がある——治水技術の伝統と近代』という書籍があって、治水の技術にも自治、つまり地域それぞれの固有のあり方や文化があるということを書かれているんですね。上からの画一的な治水をするということではないあり方が本来あったはずだという。だから、当事者や関係者で、それこそ水に親しみながら、治水にあたることができる

**熊井** そうですね。だから水のことを考えるというのは、私たちそのものあり方を考えることとかなりつながってくるなという実感がありません。

## 渋谷にヌシはいたか？

**熊井** それで、渋谷にヌシがいたかというところなんですけど、伊藤先生がかなりリサーチをされていて、研究者の凄みを感じています。

**伊藤** いや、全然調べ切れてはいないんですけども、色々と文献にあたってみました。一九六六年に出された『新修渋谷区史』には、水の伝説が多く掲載されています。

**熊井** え、渋谷に水にまつわる伝説がたくさんあるんですか。

**伊藤** そうですね。水に関わるものがたくさんあるんですが、例えば、地名や駅名でもある「神泉」もそうですよね。そのなかでヌシと関わってくるのが、例えば「羽沢の沼」。抜粋しますね。

青山学院東裏に明治初年まであった沼で、イモリ川の水源であった。松平左京の下屋敷時代にもその邸内にあり、明治の初めまで樹木が茂って屋なお暗く、沼の主といわれる大鯉がいたと伝えられる。その鯉を捕えようとして落雷にあたったとか、黒雲がこの沼に舞い降りたとか、いろ

いろの伝説が伝えられていた。『新修渋谷区史』より）

**熊井** おお！大鯉！しかもバチが当たっているんですね。

**伊藤** そう。イモリ川そのものが今では暗渠化されていますが、そういう時代もあったということですよ。明治初年なので、一八六八年とかですかね。ちなみに、渋谷にヌシはいるかと言ったときに渋谷がどこを指すかというところが難しく、行政区分としての渋谷区なのか、恵比寿や表参道あたりまでといったいわゆる渋谷文化圏なのか、そこをどう考えるかによってこの問いに関する答えの含みが変わっていきます。

**熊井** ああ、そうですね。これがその、伝説になっていったということは、どのようなエリア性を持つのかはありますが、当時の人々がある程度の束でもって、あそこにはヌシが居るぞということと共有していたということとして捉えて良いのでしょうか。

**伊藤** そうだと思います。

**熊井** そういう生活のなかでのリアリティというものを想像するとなかなかスゴイです。

**伊藤** ただ、渋谷にヌシはいたかというところで調べてみましたが、やっぱりあんまりないですね。明治の

かなり早い段階から渋谷川流域っていうのは、人間の手が入ってたわけです。

**熊井** ここまでのトークのニュアンスで言うと、ある意味人間に制圧されているということですよ。

**伊藤** そうですね。先程話にあがりましたが、渋谷に水車小屋がたくさんあると言っても、今で言う水車小屋とはイメージが違いますからね。当時の最先端テクノロジーですからね。ヌシが棲む条件としては、そもそも向いていなかったのかなという感じはします。

**熊井** まあ、そうだろうなという予

感はしていました。

伊藤 『新修渋谷区史』では他にも沼の記述がありまして。「穂田の沼」という話で、ヌシは出てこないんですが、これも抜粋しますね。

大正初年明治神宮造営がはじまって、表参道が出来るまで、大山巖の邸内となっていたが、そのころまで、樹木が繁茂し、池水は水草におおわれ、暗く、神秘的なところと思われていた、と大山柏（ママ）が語っている。大正初年埋め立てられ、のち小学校となったが、当時の湧水はのちながく校庭に湧出していた。（『新修渋谷区史』より）

それで夏になると、子どもは肝試しということをしました。この前の三田用水という大きな川がある、そこから歩いて行って、今の上原中学校の底ぬけ田んぼを通って帰ってくる、という、これが一つの肝試しのコースでした。（野村敬子編『渋谷むかし口語り区民が紡ぐ渋谷』より）

熊井 うわ。河童！底なし沼ならぬ底抜け田んぼ。本当に湿地感がありますね。狼谷という名前もまたスゴイ。

伊藤 そうですね。野村先生の同じ本からですが、「並木茂七さんが語る渋谷っ子の渋谷金玉八幡宮のことなど」というエピソードのなかで、

熊井 渋谷の小学校の校庭から湧き水。本当に湿地帯というか、水が豊かだったんですね。

伊藤 そうですね。あと、野村敬子先生という、私がお世話になっていらっしゃるのですが、『渋谷むかし口語り区民が紡ぐ渋谷』という本をまとめられていて、そこに「大木成介さんが語る幼児体験」というエピソードが紹介されています。

狼谷と言いますのは、今の上原社会教育会館のところですが、そこは昔、底ぬけ田んぼで、入ったらズルズルど、どこまでも底がないぐらい引き込まれちゃう。夜遅くなるど河童に引き込まれちゃうぞ、というくらい。

渋谷駅のところにあったという松の大木の話が出てきます。

渋谷駅のところに松の大木がありましたね。近くには馬方などがユツプ酒をいっぱいやって帰る大衆食堂があり、ずいぶん賑わっていました。震災後その道幅をひろげようと松の木を伐ったところ、その職人が死んだ。棟梁が怪我をしたりして渋谷では話の種になりましたそうです。その松の大木を伐ったところ、根元に白蛇が棲んでいたそうです。びっくりして実生の松を植えかえして、松の生命を繋いだ。それが現在北谷稲荷に植えられて「竜神の松」となったというものです。とても願いごとにご利益があるそうです。（野村敬

「子編『渋谷むかし口語り区民が紡ぐ渋谷』より」

**熊井** 松の木の崇りに白蛇。そして馬方。なんか、イメージの喚起力がスゴイですね。

## ヌシと人間の拮抗

**伊藤** 渋谷にヌシは可能かっというところなんです、そもそもヌシ伝承というものが何かっていうところを改めて言いますと、それは人間と自然との対立抗争の物語だということになります。それで、両者が共存するってことは実はかなり難しく、大抵は片方が一方的に勝つんですよ。負けた方は傷ついて、殺され

たりその場を離れていったりする。勝つか負けるかの世界ですね。だから、とにかく共存するためのコツというものは、やっぱり近づかないということ。互いに距離を置くこと。ヌシが一方的に襲いかかってくることはほばないから、人間がわきまえて近づかなければ大丈夫なんですよね。

**熊井** わきまえる。

**伊藤** そう。要するに棲み分けですよ。それで、渋谷にヌシは可能かっということの色々と考えていくことも関連するんですが、さいたま市にある見沼ってご存知ですか。

**熊井** 分からないです。

**伊藤** ヌシの本を書いた後に、調べて論文にしたことがあるんですけど、この見沼にもヌシ伝承があるんですよ。ただ、沼としては現在調整池として残っているんですが、ほとんど埋め立てられています。

**熊井** 埋め立てられている沼。

**伊藤** そう。もともとヌシ伝承があったんですが、そうなると当然、ヌシは居なくなりますよね。ちょっと話が長くなってしまいかもしれませんが、伊奈忠次と井沢為永という治水家が江戸時代初期にいました。

**熊井** 治水家という言葉にまずグツときます。

**伊藤** その二人にまつわるヌシの伝承っていっぱいあるんですよ。

**熊井** 治水家だけに。

**伊藤** ヌシと直接戦うのは土木作業を請け負っている人たちではあるんですが、伊奈家が崇られたとか、井沢為永のところにヌシが訪れて止めてくれと交渉したとか、そういった伝承がたくさんあります。見沼は全部埋められてしまったわけなんです、ここで面白いのが見沼のヌシが、千葉県の印旛沼に移るという伝承があるんですよ。人力車に乗ったヌシ

が、「どちらへ」と尋ねられて「印旛沼の方へ」なんて言うんですけど、埼玉と千葉ですから、かなり距離がありますよね。

**熊井** どうしてまた、そんな遠いところに。

**伊藤** それが、見沼と印旛沼というのは同じ利根川水系なんですよね。ところが辿った歴史は全然違って、印旛沼の干拓というのは江戸時代に何度も繰り返し返ってきて、結局失敗続きなんですよね。

**熊井** うわ。人が制圧できなかった歴史でもあると。

**熊井** 当時の人間と自然の関係に関する地政学のようなものが、伝承の中に反映されているという。

**伊藤** そうですね。ちょっと言い方を変えると、見沼では人間がもう総出でヌシを追い出したと思うんですよね。それまで見沼で行われていた龍神のお祭りというものがあるんですけど、今はね、陸でやっているんです。

### ヌシを引き戻す

**熊井** 追い出すけど、お祭りはやる。

**伊藤** 面白いですよ。さらに面白いのが、そこから最近また変化があ

**伊藤** はい。江戸時代中期に幕政で手腕を発揮した田沼意次の失脚のきっかけになったのは、印旛沼開拓の失敗なんですよ。

**熊井** なるほど。

**伊藤** 一方で見沼は制圧されたわけです。簡単に言えば、見沼では人間がヌシに勝ったんだけど、印旛沼ではヌシが人間に勝ったんですよ。印旛沼放水路というものは、結局計画倒れで現在に至るまで作られてないんです。だから見沼のヌシが印旛沼に行こうとする伝承というのは、そういったことが背景にあるんじゃないかなって思います。

りまして、さいたま市にお住まいの方なら分かると思いますけども、ヌウって見沼の龍神がモチーフになったキャラクターが誕生したんです。

**熊井** へえ。

**伊藤** ヌウは、さいたま市のPRキャラクターになっていて、大宮市と浦和市と与野市が合併してさいたま市になり、新たなシンボルが必要になったときに生まれたんですよ。

**熊井** なるほど。

**伊藤** 見沼龍神祭って毎年開催され



ていてコロナで止まってしまいましたけど、実は新しいお祭りで、さいたま市が生まれた時に始まったものなんです。だから見沼付近の住人たちは、一度自分たちが追い出したヌシをもう一度引き戻したと言えるんです。やっぱりヌシに居て欲しいっていうことで。それが一つモデルケースにはなるかな。

**熊井** うわー。ヌシを引き戻すというこのモデルケース。ただ、沼そのものは埋め立てられたままなんですよね。

**伊藤** そうですね。見沼が元の状態に戻ることはもうないでしょうね。だけど、やっぱり潜在意識というよ

りも顕在意識という形でと言っても良いと思うんですけど、住民たちの間ではヌシというものに対して恋心を持っているんじゃないですかね。

**熊井** 同じ恋心を持つもの同士で交流したいです。

**伊藤** 渋谷川の現在の状態というのは、まさに人間がやった結果なんですけども、やっぱりこういったヌシの話に喜ぶ気持ちがあるわけですよ。それはやっぱり、ヌシと人間の新しい関係ができてつあるんじゃないかなって私は思いました。

## ヌシと人間の新しい関係

**熊井** ヌシと人間の新しい関係。

**伊藤** 今日のトークイベントのお話をいただいたときに、あんまり乗り気じゃなかったのは、発言が否定的な感じになっちゃうんじゃないかというのを気にしていたんですね。

**熊井** 渋谷にヌシはいませんが、終わり、という。

**伊藤** そう。渋谷にヌシはもう無理だよって。そもそも人工的な空間にヌシが棲むことはないし、親水という概念を導入したとしても、水の流れの綺麗なところにヌシは棲まない

んです。だから、これまでの論理や理屈で言うならば、渋谷にヌシは可能かと言われたら不可能だっていうふうに言わざるを得ない。ところが、こういった事実があるわけですよ。見沼のヌウもそうですが、渋谷川に河童が出没して結構みんなが喜んでいっているという。そうすると、ヌシを退治するとか封じ込めるとか、そういうところから次の段階にきているのかなって感じがしました。

**熊井** うわ。これまたスゴイことをおっしゃいますね。

**伊藤** ヌシの本のブックレビューを一般の方も書いてくださることがあるんですが、やっぱり自分の地元

もヌシはいないかなって思っていたり、居て欲しいと思っていたりする人が結構多いわけなんです。だから、ヌシの本のあとがきにも書いたんですが、隣人という捉え方ができるわけです。そうすればですね、治水、利水から親水という流れともやっぱり呼応してるんです。

**熊井** 確かに。なんか今、スゴイ話を聞いてしまっている気がします。

**伊藤** 人と水との関わり方っていうのがもう劇的に変化してきているわけですよ。そうすると、ヌシとの関わり方っていうのもやっぱり変化していくであろうということで、そうなるちょっと、当初と考え方が変

わってきまして、渋谷にヌシは可能じゃないかなというふうに思うようになってきています。

**熊井** どひゃー。

**伊藤** きっと、この世の中に生きてるのが自分たちだけじゃないっていうことを欲しているんじゃないですかね。

**熊井** うわ。もう、ちょっとお聞きしたいのですが、隣人という言葉も出てきましたが、自分とは異なる存在としての隣人が居て欲しいということですかね。

**伊藤** そう。そのような隣人的な存

在に居て欲しい。

**熊井** 異なるっていうのは、まさにヌシなるものも自然という存在も含めつつの、つまり大きな意味での他者。その他者とどう良き隣人になるのかっていうのは、人類が背負っているかなり重要なテーマであるように思います。

**伊藤** ヌシって言葉がね、いろんな意味あるんですよ。まず、主（あるじ）ってなる場合は、当然ヌシの方が上ですよ。人間は対等よりもちょっと下ぐらいの関係。ただそんなに悪い関係はないわけですよ。そして、その時にこちらは客にもなるわけです。

**熊井** 主客関係での、ヌシと人ですよ。

**伊藤** そうなると、こちらには客としての態度つてのが求められる。

**熊井** あー、客としてのわきまえが必要になってくるという。

**伊藤** 一方で、主様（ぬしさま）という言い方もありますが、その場合はあなたという意味があるんですよ。ね。

**熊井** 時代劇を見ていると相手のことを、おぬしって言いますもんね。

**伊藤** そう。その場合は隣人という

言葉に近づいてくる。客としての態度というものが求められつつも、そういう親しみのある隣人としてのヌシが求められているのかもしれないね。

研究史を振り返っていて思うのは、かつて妖怪や幽霊が「話されていた」という事実には、少々無頓着だったかもしれないという点である。口承としての怪談の「場」のなかに、妖怪を戻してやる試みも必要であろう。話し手の身体と聞き手の身体が交差する怪談の「場」と、身体感覚のメタファーである妖怪の行動とには、密接な関係があるはずである。また、書承の場合でも読み手の「読む」身体を意識した技法が、書き手によって施されていたはずである。

——伊藤龍平『ネットロア ウェブ時代の「ハナシ」の伝承』より

# 又か? 能か?

2024年1月29日(月)19時から21時  
 渋谷ヒカリエ8階COURT  
 無料・事前予約優先

ゲスト: 伊藤蓮平 (東京大学・教授)  
 司会: 藤井隆史 (omoomo.org)  
 共催: omoomo.org 共催: 渋谷ヒカリエ

お申し込みは、公式サイトより  
<https://omoomo.org>



# 渋谷に、 又か? 可能か?



# 面




## 異人歓待

**熊井** ここまででスゴイたくさんインスピレーションがあったんですが、ヌシという言葉が孕んでいる意味の深さも感じてしまいました。ここ数年「異人歓待」という人類の営みを調べるといふか、考えたりしているんですね。例えば、言葉も通じないような集団同士が遭遇した時どのようにして迎え入れるのかということなんですが、それを「異人歓待」と呼ぶわけですよ。それで、じゃあだれがその「歓待」をホストとしてしていたかという、部族なりの集団の主（あるじ）であったとされています。一方で、貨幣経済が広がっていくと、その「歓待」を

する場所が、宿や飲食店といったものになっていく。つまり「異人歓待」が大衆化したとも言えるし、一般化や民主化したとも言える。そこから一つの教訓を導き出すならば、全員が主（あるじ）たれ、ということと同時により良き客人たれ、ということでもあるなと思っていました。

**伊藤** ひよっとしたらヌシと隣人関係でいられるかという話にもつながってくるかもしれないが、とにかくヌシを主（あるじ）とした際に、もう全ては客であるこちら側の出方次第なんですよ。繰り返しですが、ヌシの方が一方的に襲ってくることはないわけですから。

**熊井** その話って、スムーズにうんと聞いちゃっていたんですが、よくよく冷静に立ち止まってじっくり考えてみると、ものすごい設定だと思ふんですよ。設定というか掟というか。すべてのキーをこちらが握っている、握らせてもらっている。ヌシは、ずっとこちらのスタンスを見てくれている。それはきっと安易に信じているとか見守っているというわけでもなくて、ただただ見てくれているという。

## 集団的詩的想像力

**熊井** もうちょっとお訊ねしたいんですけど、伊藤先生の本を何冊か拝読していくと、人と自然、人と人と

いった関係性の束から生まれる物語があるんだなというのが非常に腑に落ちてくるんですね。一個人が創作した物語ではなくて、ある意味で言う時代空間を超えた集団創作的な意味での、ヌシの伝承みたいな感じ。そういう集団的だったり共同体的だったりする営みから生まれる物語ってというのが、その共同体にとっ ていかに必要だったかっていうのも、見えてくるわけなんですよ。

**伊藤** そこがまさにわたしの専門としていた伝承文学というものなんですよね。『吾輩は猫である』の作者は誰ですかって言ったら、個人の名前が出てきますけど、『桃太郎』の作者は誰ですかってしても作者はい

ないわけですよ。ただ、全く誰もいないわけじゃなくて、おっしゃられたような集団創作で伝承されていくうちに言葉が練り上げられていてストーリーがまとまっていく。それがつまり、伝承文学なんです。

**熊井** 面白いです。伊藤先生がおっしゃる「詩的想像力を取り戻す必要がある」というのは、個人の詩的想像力の話でもありつつも、集団的な詩的想像力をいかに發揮するかという問いでもあるわけですよ。

**伊藤** 『何かが後をついてくる』っていう本に書いたんですが、「ビシャガツク」という福井県のマイナーな妖怪の話なんですけども、雪道を歩

**伊藤** 名付けることで共有がしやすくなるわけですよ。

**熊井** その名付けにも詩的創造力を感じます。「ビシャガツク」ってなんとも、溶けた雪がまとわりつくおどろおどろしい感じがします。

**人がいるからヌシが生まれる**  
**ヌシがいるから人がつながら**

**熊井** もうちょっと触れておきたいんですけどお訊ねするのですが、伊藤先生の『ネットロア ウェブ時代の「ハナシ」の伝承』という本からも多くのインスピレーションを受けています。伝承が人の関係から生まれるとするならば、その関係というものは、

いてると、後ろからビシャビシャとか何かついてくるような感覚があるんですね。おそらくこれに近い感覚って、みんな経験してると思うんです。雪国の人だったら特にそうなんです。そうじゃなくても、夜道を一人で歩いているときに後ろに誰かいるんじゃないかって。

**熊井** わかる気がします。暗いところで一人だと特に。

**伊藤** それが個人の体験であるうちは、ただの怖い体験なんです。それが共有されたとき、名付けられたときに、そこに妖怪が生まれてく。

**熊井** 名付け。

おそらくこれまでは地縁や血縁といった縁のあり方が連想されるんです。そこから伝承が生まれてきた。一方で、これだけ人が移動し、地縁や血縁といったものの関係性がゆるやかになくなっていった現在の社会をみるときに、じゃあ伝承文学のようなものが生まれるのだろうかという問いは非常に興味深いことだと思っんです。つまり、人と人との結びつき方はどのようになっていくのかというものとほぼ同義の問いになっていく。渋谷にヌシは可能かという問いも、おそらくこれも関わってくる。

**伊藤** 伝承文学の研究をしているなかで、これまでのやり方では対処できない現象が生まれていくんですよ。

ね。「ネットロア」という名称は、インターネットとフォークロアを組み合わせた造語です。これは「2ちゃんねる」時代に書いていて、この本が出たのが二〇一六年ですけども、対象としていたのは二〇一〇年くらい。現代のスマホ時代では、ちょっと合わなくなってきましたけどね。ただいづれにしても、インターネット空間だとしても、人と人が結びついてるところがあれば、話も生まれるんですよ。

士の関係から、又シが生まれる」さらに、「又シが居るから、人と自然、そして人同士が関係を持つ」とも言えてくると思うんです。そして、その関係の場が、リアルな場所だけでなく、インターネット空間も含まれていく。おそらく、それが非常に渋谷的でもあると思うんです。今回、又シについて考えることが、私たち自身のことを考えることでもあると強く感じました。是非、第二回の開催も検討していきたく思います。

**熊井** 伊藤先生の「人がいるから説話

話

**伊藤** まあ、またやりとりしていきましよう。

人がいるから説話が生まれる。説話があるから人は結びつく。神話や昔話や伝説はもちろん、世間話であっても説話のあるところには、必ず人がいる。人と人がコミュニティになる際には、ときには潤滑油として、ときには接着剤として、説話は機能する。

——伊藤龍平『ネットロア ウェブ時代の「ハナシ」の伝承』より





# 渋谷川のほとりで開催している

## 「SHIBUYA SLOW STREAM」

音楽、藝術、植物、食、ケア。様々なテーマを掲げながら開催をしています。毎回周辺の清掃活動をしていたり、地域の街歩きをしていたりも。その一環として、渋谷川に入ってみるといふ活動もしましたが、「川に入ってみたい!」という方や「その景色を見てみたい!」という方、「祖父や祖母が昔は渋谷川で泳いでいたよって話を聞いていて!」という地元の方など、多くの方々の反応がありました。



ときには、河童が遊びにきてくれることも。



渋谷川のほとりの清掃活動中に、蛇を目撃したこともありました。



小さなビオトープも、試行錯誤しながらの実践中。ヤゴを宿すことにもなりました。



OMOOCITY トークイベント記録小冊子

## 渋谷に、ヌシは可能か？

発行：omoomocity production

企画／聞き手／編集：熊井晃史

記録／デザイン／造本：佐藤海

キービジュアル：Somedarappa

powered by 渋谷ヒカリエ Creative Space 8、國學院大學広報課